

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 23 日現在

機関番号：10101

研究種目：若手研究(A)

研究期間：2010～2013

課題番号：22683006

研究課題名(和文)日本における民族マイノリティビジネス：国際比較史の視点から

研究課題名(英文) Ethnic Minority Business in Japan: International comparison in historical perspective

研究代表者

韓 載香 (HAN, Jaehyang)

北海道大学・経済学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：60396827

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,500,000円、(間接経費) 1,350,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本の代表的エスニックビジネスのパチンコ産業について、発展要因と韓国朝鮮人集団の関係を歴史的に解明した。パチンコ産業は同集団が人口比率を上回る比重で参入し、巨大市場に成長した世界的にみて注目すべきエスニックビジネスである。参入時には民族コミュニティが重要な役割を果たしたが、産業発展の要因は企業経営変化、組織化、技術革新等、一般社会との関連にあった。80年代の巨大市場への急成長によりビジネスとチャンスとして認識され、一般社会からの参入が殺到した。その結果外国人企業の比率は低下し、そのプレゼンスは縮小した。本研究は、2015年に研究書(名古屋大学出版会)として出版される予定である。

研究成果の概要(英文)：The present research aims to reveal the historical dynamics of the pachinko pinball entertainment industry that represents the largest ethnic business in Japan. It attempts to examine the relationships between the developmental factors and the ethnic group from international perspectives. This research finds that the Korean-Japanese entrepreneurs engaged in to the industry and utilized the intra-ethnicity resources in the process. But the development of that industry should be explained by such factors as the adjustment of management, the systematization, and technological innovations, all of which are integrated into the Japanese society. Further, the rapid growth of huge markets functioned as a turning point at which non-ethnic people started recognizing that industry as a business opportunity and began to engage into the business. Consequently, the proportion of non-Japanese ownership declined so that ethnic elements in the business became lessened.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学・経済史

キーワード：エスニック・マイノリティ エスニック・マイノリティ・ビジネス 在日韓国・朝鮮人 パチンコ産業  
ネットワーク 移民

## 1. 研究開始当初の背景

エスニック・マイノリティに関する研究は、グローバル化の進展の下で移民の規模が増大するなか、その重要性の認識と共に国際的関心も高まり、歴史学、社会経済学、社会学、経営学など様々なアプローチから蓄積されてきた。それに比べて、日本のエスニック・マイノリティについての研究、とりわけ経済関連の分析は充分とはいえない。学術上の遅れの問題は、実証、理論分野にわたっている。本研究では、国際比較研究の研究蓄積に実証的側面から貢献することを意図し、必要性が高まっている日本のエスニック・グループの経済活動の実態提示を試みる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、日本における民族マイノリティビジネスの歴史を明らかにすることにより、国際的に比較可能な研究として貢献するとともに、学問的なアプローチから日本の外国人関連の政策に対してインプレーションを与えることである。

## 3. 研究の方法

2の目的を達成するため、本研究では、まず、日本の最大の民族マイノリティである在日韓国・朝鮮人の代表的ビジネスであるパチンコ産業の歴史について、発展要因に注目して明らかにした。そして、中国人などの他の民族ネットワークに関する既存研究の成果と比較検討しながら、在日韓国・朝鮮人のコミュニティがエスニック・ビジネス産業の発展においてどのようにかわったかを提示した。

本研究の歴史的アプローチは、次の資料及び分析方法に基づいている。第1に、在日韓国・朝鮮人ビジネスを歴史総体的の解明するため、同コミュニティが調査・編集した企業名鑑(韓日文化センター『在日僑

胞實業人名録』1967年、企業名鑑の統一日報社「在日韓国人企業名鑑編纂委員会」編『在日韓国人企業名鑑』1976年、在日韓国会社名鑑編集委員会編『在日韓国人会社名鑑』1997年)の集計分析を行った。第2に、エスニック・ビジネスの産業発展の要因と代表的企業の成長基盤を明らかにするため、パチンコ産業の代表的企業として正村商会、在日韓国・朝鮮人企業のマルハンの資料収集及びインタビュー調査を実際し、経営史的分析を行った。第3に、外国人企業が産業発展のなかで示したかわりの変化を検証するため、産業関連の業界誌などの史料の収集及び分析、東京都遊技業協同組合・東京都遊技場組合連合会『都遊協・都遊連組員名簿』を集計分析した。

## 4. 研究成果

研究成果は、5に示した活動によって公表しているが、得られた知見について以下のようにまとめることができる。

### (1) 日本のエスニック集団の特徴

移民国家の北米や外国人労働者を積極的に受け入れた西ヨーロッパにおいては、自営業率の高いエスニック集団が注目されてきた。例えば、アメリカでは、アジア系移民など特定エスニック集団の自営業率の伸びが、マジョリティに比べて顕著に表れた。起業率が高かった場合、世代交代を伴った社会階層が上昇した。この要因について、特定エスニック集団の企業者活動の基盤として内在する資源に注目した説明、理論化がなされてきた。

日本の外国人の自営業率は、一様ではない。2010年における人口規模の最も大きい中国籍の自営業率は、マジョリティに対して半分程度に留まり、ブラジル籍、フィリピン籍も低水準であった。他方で在日韓国・朝鮮とパキスタン籍は他民族と日本人

より、自営業率が際立って高い集団であった。

自営業率が極めて高かった在日韓国・朝鮮人の特徴は、他の民族集団とは異なる労働市場での条件と歴史的条件を背景にした社会関係資本の蓄積に関連している。在日韓国・朝鮮人の高い自営業率の結果をもたらしたビジネスは、他の集団が自らのエスニック集団を市場基盤にしたり、エスニック集団の文化に関連するサービスや財を提供したりしていたのに対して、日本人マーケットを基盤にしていた。エスニック集団を超えたマーケットが基盤となれば、参入可能な主体数も市場規模だけ増大するのであり、そのような市場の発見が、同集団の高い自営業率に相応している。中国籍は他の集団より留学資格の比率が高く、労働市場への浸透と中国と日本のビジネス関係が、就業率と自営業両方に機会を与えた。パキスタン籍は、日本の中古車を本国に輸出していたが、途上国に広がっている同胞のネットワークを基盤に広域的に貿易を展開するまでになった。

在日韓国・朝鮮人の代表的事業は、30兆円の巨大市場に成長したパチンコ産業であった。在日韓国・朝鮮人集団が産業発展に大きな役割を果たしたことから、日本の代表的エスニック・ビジネスとして位置づけ、産業発展の要因とエスニック・コミュニティの関わりを考察する。

## (2) エスニック・ビジネスの発展と在日韓国・朝鮮人

パチンコ産業は、在日韓国・朝鮮人が人口比率を上回る比重で参入し、巨大市場に成長した世界的にみて注目すべきエスニック・ビジネスである。

パチンコ産業が産業として定着するチャンスをつかんだのは、最初のブームによって全国市場が形成された1950年代前半に遡

る。しかし、当時パチンコ産業の長期的発展は、予見不可能であった。警察による規制も明確な基準がなく、景品交換の制度も整っていなかった。ホール経営は、極めてギャンブル性が高い機械に影響され日々の営業成果の予測が難しく、事業の計算可能性に欠けていた。このような不安的なビジネスのままでは、パチンコホールの店舗展開や機械メーカーの開発投資を期待することはできなかった。ギャンブル性の高い機械が規制されたこと、釘調整のノウハウの蓄積によって収益基盤が安定化したこと、景品交換の制度整備への取り組みが進行したことが、市場安定化をもたらし、漸く産業として定着し始めた。他方で、機械メーカーの組織化が推し進められ、機械開発による技術発展が期待できるようになった。このようなパチンコ産業に対して、在日韓国・朝鮮人は産業発展を主導する役割を果たすようになった。

1950年代前半のブーム期に、他の日本人と同様に参入した在日韓国・朝鮮人の事業経験により、コミュニティ内に産業関連の情報が形成された。1950年代後半以降、ホスト社会からの参入が敬遠されたことによって、パチンコ産業の情報は、特定の民族コミュニティのなかで蓄積されていくことになった。1970年代まで個人的な繋がり等、インフォーマルな関係によって産業関連の情報が伝わり、在日韓国・朝鮮人にとってパチンコ産業は選択しやすい事業となった。他方で、コミュニティによって全国に設立された民族系金融機関からの資金調達も、パチンコ産業への参入を容易にする役割を果たした。その中、大阪の有力民族系金融機関にみられるように、1970年代末になると組織的情報生産・蓄積が行われホール参入を促すフォーマルな情報伝播の取り組みも加わった。このように、長期にわたって、パチンコ産業の発展は、コミュニティ内の

情報蓄積を基盤に、特定民族のなかから輩出される担い手に依存することになった。

1980年代に入ると、パチンコ産業は、機械のデジタル化とともに、ホールの多店舗展開の基盤が整えられ、それまでとは異なる発展段階へ移行した。高い成長率のもと、30兆円市場まで急速に成長すると、高い成長を続けるビジネスチャンスとして注目される存在としてパチンコ産業の社会的な評価が変わっていった。他方で、社会的マイナスイメージの一つの要因であった暴力団との関連は、行政や業界のタイアップの活動のもとで、産業全体の実態として薄まりつつあった。

このように、パチンコ産業に対する成長の経済性が社会的認知度の高まりに合流すると、非エスニック・グループからの参入も本格化になった。非日本人の比率は、1980年代を挟んで低下し、この市場成長期における在日韓国・朝鮮人の参入の重要性も変化した。1950年規制によって暴力団との関係が疑われるなどのダークなイメージによって、日本人が積極的に関与することが少なく、それ故にエスニック産業としての特徴を強く帯びていたが、マルハンのようなエスニック企業家の企業の継続的な成長とともに、ビジネスチャンスと認識した日本人の積極的な参入によって、そのエスニシティ性は希薄化された。

この点は、機械メーカーにおいて同様であった。1997年の日本遊技機特許連盟の解体を背景に、パチンコ機械への新規参入の動きがあった。1980年代以降の市場成長、90年代のメーカーの株式市場への上場などに誘引され、それまで維持されていた機械メーカー間の協調的仕組みは、解体された。

### (3) エスニック企業の資源調達とエスニック・コミュニティ

1980年代の産業発展を背景に、マルハンのようなホール事業のトップ企業は、全国展開の本格化を推し進めた。マルハンなど、エスニック・マイノリティのパチンコホールの個別企業の場合、多店舗展開のための資源(例えば、資金)に関しては、1970年代に既にコミュニティの外からの調達が必要であった。実際、マルハンは、1970年代の広域的展開における資金調達も、80年代以降の本格的全国展開のためのそれも、一般金融機関との取引が基盤になった。それは、パチンコ産業の発展を舞台としたマルハンの成長がコミュニティの経済発展のスピードを上回る資金を必要としたからであった。他方で、多店舗化は業界を先導していたから、コミュニティの平均的な情報とは隔離した同社企業内に蓄積した情報が基盤になった。

以上のように、エスニック要素を強く帯びたパチンコ産業は、個別企業の成長においては、1970年代から既にホスト社会からの資源調達及び独自の情報蓄積を不可欠な基盤としていた。また、1980年代以降の発展は、液晶など電子関連の産業、ソフトウェア開発産業、ホール内のコンピューター制御など他産業での技術発展を取り込んで進行し、ホスト社会との関連性をますます高めていった。

### (4) エスニック・コミュニティ機能

パチンコ産業の発展は、インキューバーとしてのエスニック・コミュニティの役割、エスニック集団とホスト社会両方にまたがる開かれた組織的対応及び資源調達、規制に対応するなかで、イノベーターを生み出したことの結果であった。それらが、ホール経営とメーカーの開発のプロセスにおいて重視され、産業維持及び発展に不可欠であった。

以上のようにエスニック・ビジネスの発

展は、予測できないものであった。技術発展は、産業内で、コミュニティ内で、閉じられたものではなく、他産業とのかかわりや一般社会との関連性の中で成し遂げられたものであった。そのなか、産業発展と共にコミュニティの機能が低下したように見えるのは、コミュニティ機能が産業発展をサポートする中で行われた、積極的な企業活動の結果であった。パキスタン籍の中古車の貿易事業においても同様にみられた民族のネットワークに蓄積される情報の役割は、産業発展とエスニック・コミュニティが果たす経済機能の深い関連性を示唆する。

本研究は、2015年に研究書(名古屋大学出版会)として出版される予定である。

## 5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計 6件)

- 1 韓載香「パチンコ産業の発展史：1950～80年代」進化経済学会 北海道・東北部会、札幌市(2014年3月8日、北海道大学大学院経済学研究科)
- 2 韓載香「地域経済とエスニック・マイノリティ・ビジネス」地域経済経営ネットワーク研究センター 2013年度第6回研究会、札幌市(2014年2月14日、北海道大学大学院経済学研究科)
- 3 韓載香「在日韓国・朝鮮人のビジネスの成長とその基盤」新潟大学研究推進機構超学術院主催国際若手研究者シンポジウム、大阪市(2014年1月11日追手門学院大学 梅田サテライト、12日阪急ターミナルスクエア 17「さつきの間」)
- 4 韓載香「The Dynamics of Ethnic Minority Business in Japan: The Development of the “Pachinko” Pinball Entertainment Industry」EBHA-BHSJ

Paris 2012:Busines Enterprises and the Tensions Between Local and Global、パリ

- (2012年8月31日、Université de Paris)
- 5 韓載香「パチンコ産業における規制と企業家活動」企業階研究フォーラム冬季部会大会・経営史学会関東部会共催、東京都(2011年12月11日、東京理科大学)
  - 6 韓載香「パチンコ産業の巨大市場化 1980年のフィーバー機がもたらしたものの」経営史学会第47回全国大会、博多市(2011年10月15日、九州大学)

〔図書〕(計 3件)

- 1 韓載香『パチンコ産業史』名古屋大学出版会、2015刊行予定、352頁。
- 2 韓載香「エスニック企業家」『企業家のおすすめ』有斐閣、2014年、457-472頁。
- 3 韓載香「韓国・朝鮮人」『日本のエスニック・ビジネス』世界思想社、2012年、37-72頁。

〔ディスカッションペーパー〕(計 2件)

- 1 韓載香「1980年代以降のパチンコ産業の発展とホール事業変容に関する一考察」北海道大学大学院経済学研究科ディスカッションペーパー、Series B, No.2014-121、2014年
- 2 韓載香「1980年代におけるパチンコ産業の発展とMホール事業の行き詰まり フィーバー機がもたらしたこと」北海道大学大学院経済学研究科ディスカッションペーパー、Series B, No.2014-121、2014年

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

〔その他〕

ホームページ等 なし

## 6 . 研究組織

(1)研究代表者 韓 載香 (HAN Jaehyang)

北海道大学 . 大学院経済学研究科・准教授)

研究者番号 : 60396827

(2)研究分担者 なし

(3)連携研究者 なし